

佐藤典司 優秀審査員賞

兵庫県神戸市

坂本 ユミ子

## 「百日たったたらね」

子供の頃、買ってほしい物があつたり連れて行ってほしい所があつたりした時、母にお願いすると、母はよく約束しました。「百日たったたらね」。でも、たいていは果たされませんでした。子供だった私は約束を忘れてしまうし、ほしかった物もほしくなくなっていました。

あれは私が小学校に入る前でした。母が初めて不二屋の苺ショートケーキを買って来ました。ふわふわのスポンジに生クリームと苺がふんだんに乗ったケーキはこの世の物とは思えないおいしさでした。

「心齋橋にある不二屋のレストランはおいしい物が一杯あるよ。今度みんなで行こうね」

「今度って、いつ?」と私が聞くと、母はいつものように「百日たったたらね」。私はその日が来るのを心待ちにしていました。百日は長い。忘れないようにカレンダーに○印を付けておけばいいのに、そんな知恵は幼い私にはありませんでした。

「不二屋にいつ連れて行ってくれるの?もう百日たったよね」

時おり思い出して聞くと、「あと百日たったたらね」。そのくり返して約束は果たされませんでした。

父が交通事故で亡くなった時、姉は六歳と四歳、私は二歳でした。母は生命保険の外交員で生計を立て、女手一つで私たち三姉妹を育ててくれました。

「百日たったたらね」は母のおまじないの言葉だったのかもしれませんが。百日たったたら、もっとお給料が増えて生活が楽になる。子供たちに欲しい物を買ってやれる。不二屋に連れて行ってやれる。あの頃、そう信じて母は生きていたのでしょうか。

母が亡くなって十八年になります。時おり母の声が聞こえて来ます。「百日たったたらね」。

苦しい時も悲しい時も、生きているのが嫌になった時も、百日後の明るい未来を信じて、私は生きて行きたい。母のように。